



秋田県におけるアスパラガス褐斑病の発生実態と薬剤耐性菌の発生状況

秋田県農業試験場

さいとう 齋藤

たかあき 隆明

ふじい 藤井

なおや 直哉

わたなべ 渡辺

きょうへい 恭平

秋田県立大学

ふじ 藤

しん 晋

いち 一

はじめに

秋田県におけるアスパラガス栽培は、作付面積 362 ha (2020 年度統計)、収穫量 1,380 t (全国 9 位) で野菜の中で重要な品目の一つとなっている。アスパラガスの主な作型は、春どりを早めに打ち切り、立茎しながら収穫を継続して夏秋どりに移行する露地長期どり栽培(以下、露地)がほとんどであるが、近年は、露地よりも早く収穫することができ、収量性が優れるハウス半促成栽培(以下、施設)の普及がすすめられている。

本県でのアスパラガスの斑点性病害に対する薬剤防除は、主にアスパラガス斑点病(以下、斑点病)を対象として行われてきたが、2019 年 9 月に県内の施設圃場において茎葉部の上位の黄化・枯死症状が多発し(図-1)、被害部位を確認すると、図-2 の病徴が多く確認された。詳細に調査した結果、斑点病と病徴が酷似しているアスパラガス褐斑病(以下、褐斑病)の発生が初確認された(齋藤ら, 2021)。そこで、現地圃場における褐斑病の発生実態を把握するとともに、調査を行う中で耐性菌の発生が疑われたため、その発生状況も合わせて調査した。本稿ではこれらの試験結果の概要について紹介する。

I 秋田県における褐斑病の発生実態

2020 年と 2021 年に県内 11 市町のアスパラガス圃場において、褐斑病の発生実態を調査した。その結果、露地や施設に関係なく、褐斑病は県内に広く発生しており、特に、施設では褐斑病単独または斑点病との混発(褐斑病優占)圃場が約 80% と高い割合であった(表-1, 2)。褐斑病は暖地に多い傾向であることが知られており(尾沢, 1982)、施設では露地に比べて高温になりやすいことが本病の発生が多い要因の一つとなることから、寒冷



図-1 アスパラガス褐斑病による茎葉部の上位の黄化・枯死



図-2 アスパラガス褐斑病の病徴

地の北海道でも施設で本病の発生が確認されている(中塚ら, 2016)。また、今回の調査結果から、褐斑病の発生を初確認した 2019 年以前から県内で本病が発生していた可能性が高いと考えられた。

II 薬剤耐性菌の発生状況

秋田県では、アスパラガス栽培における基幹防除剤として QoI 剤が使用されてきたが、すでに県内では斑点病菌に対して QoI 剤であるアゾキシストロピン水和剤(シンジェンタジャパン株式会社、商品名: アミスター

Field Survey and Occurrence of Fungicide-Resistant Field Isolates of Leaf Spot Disease on Asparagus Caused by *Cercospora asparagi* in Akita Prefecture. By Takaaki SAITO, Naoya FUJII, Kyohei WATANABE and Shin-ichi FUJI

(キーワード: アスパラガス, 褐斑病, 薬剤耐性菌)